

TOKYO MOVING
ROUND

東京感動線

magazine

2023 Spring

Vol. 9

Supported by Orangepage

TAKE
FREE

息
づ
く
ア
ー
ト



まちに、くらしに、息づくアート

「アート市場はオークション等の高値の取り引きが話題になるなど、活況を呈しているそうだが、そんな状況から感じるのは、アートはまだまだ非日常のもので、私たちのくらしとはちよつぱり距離がある、ということ。けれど、少し目を向けてみると、駅やカフェ、ビルなど、まちなかで、「アートを身近なものに」を掲げ、奮闘している人たちがいる。ここでは、私たちのくらしに寄り添う形でアートを発信している人たちにフォーカスした。



撮影時の1階のカフェでの展示は、イラストレーター killisco 氏の個展「Happenstance」。カフェという身近な場所に、入手しやすい小ぶりな作品も並ぶので、ふらっと立ち寄った人が購入することも（現在は別の展示を開催）。



コーヒー一杯を飲む
ところから始まる、
気軽なのに
濃密なアート体験

撮影時の2階の展示は「北欧デンマークのヴィンテージ家具工芸展」。アーティスト谷崎一心さんの油彩作品とともに静謐さを感じる空間に並び、アートもヴィンテージ家具も互いを引き立て合っている（現在は別の展示を開催）。

Lurf MUSEUM

「本物」がつくり出す世界観が
過ごす時間を豊かにしてくれる

恵比寿・代官山エリアといえば、アパレルの旗艦店やセレクトショップが立ち並ぶトレンドの発信地。一方で、アートギャラリーが点在していたり、蔦屋書店の入る複合施設があったりと、大人の知的好奇心をそそる、文化的なまちという面もある。そんなまちに昨年、オープンしたのが、Lurf MUSEUM（ルーフミュージアム）。入り口から覗き込むと落ち着いた雰囲気のカフェのようであり、Tシャツや雑貨が並ぶセレクトショップのようであり。別の入り口には、美術館の展示案内のようなフックが掲げられ、名前もミュージアムとなっている。いったい、ここは何の施設だろうか？

中に入ってみると、そこはゆつたりとしたカフェスペース。1920〜40年代のヴィンテージの北欧家具が配され、同じく北欧のヴィンテージ照明が光の層を重ねたかのような柔らかな明かりで空間を照らしている。ミュージアムピース級の逸品といえるほどの椅子に座って、照明の光に癒やされると、聞こえてく

フックをたくさんつくって
間口を広げ、アートを身近に

「美術館よりは気軽に、でもギャラリーよりは濃密にアートと向き合える空間をつくりたかったです。カフェという日常に近い空間で、ゆつたりと作品を見られる新しい場を」と話すのは、Lurf MUSEUM 運営責任者の松川直仁さん。

立ち上げ&運営メンバーは、それぞれの得意分野の中でアートと関わりを持ってきた、若い人材。カフェなど、初挑戦分野に関しては学びを深めつつ、理想とする空間づくりを追求。ゆえにオープン半年ながら、10代〜60代以上の人たちが幅広く集まる場に育ってきている。

「きっかけはコーヒーでも、北欧家具でもいい。いろいろな切り口をつくることで、間口が広くなります。コロナ禍を経て、オンラインの利便性は理解しつつも、逆にその場になければ体験できないところが貴重と実感された方も多いはず。だから、ここではライブでリアルな体感の場を提供したいんです」

美術館で絵画鑑賞はしても、購入となると縁遠かった人が、居心地の

る音楽はアナログレコードによるもの。オーディオシステムには、50〜60年代のスピーカーや真空管アンプが使われ、マニアも驚きた。提供されるコーヒーはもちろん、食器に至るまで、ひと目で上質とわかるクオリティだ。そして目に飛び込んでくるのが、壁にかけられたアートたち。ここで過ごす時間を豊かにしてくれるあれこれに、目も気持ちは慣れたところで、いざ2階へ。広々としたギャラリースペースが現れ、さらなるアートが迎えてくれる。もちろん作品は実際に購入できる。敷居が高すぎると感じる人には、アートをモチーフにしたアイテムや作品集の販売もある。そう、この場所が提供してくれるのは、コーヒー一杯から始まるアート体験なのだ。



運営責任者の松川直仁（まつかわなおひと）さん。Lurf MUSEUM の立ち上げのために精銳が集まり、タッグを組んで新しい場をつくり上げている。「1階はリラックスできるカフェ。2階は絵と真剣に向き合える空間。そのギャップも楽しんでいただきたい」。

いいカフェに絵が展示されていることで、家にアートのある様子がイメージできて購入に至る。アートに一切興味がなかった若者が散策ついでに覗き込んだらアートのおもしろさに気づき、絵は買えないまでも、作家のオリジナルグッズを手に入れることでアートを身近に感じる。そんな声も実際に届いているという。「紹介するアーティストもコンセプトも決め込まず、自由に幅広くやっていきたい。常にオルタナティブな空間でありたいですね」

カフェカウンターの家具まで北欧ヴィンテージというぜいたくさ。照明は、ポール・ヘニングセン。一角には、ミュージアムショップのような場所があり、アーティストの関連グッズ（ポスター、Tシャツやマグカップ、作品集など）が購入できる。本物だけでなく、予算に応じてワクワクを家にまで持ち帰ることが可能。

Lurf MUSEUM

東京都渋谷区猿楽町 28-13
Roob1-1F・2F
営業時間：11:00〜19:00(カフェのラストオーダーは18:30) 不定休
入場無料・事前予約不要

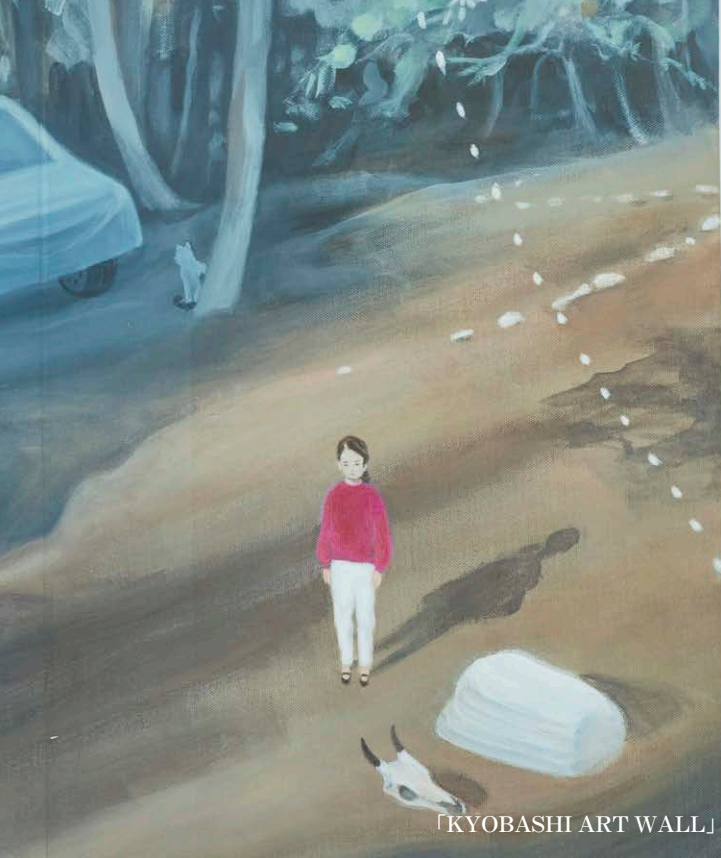


KYOBASHI ART WALL

ここから未来をはじめよう

戸田建設株式会社 京橋プロジェクト推進部の岩澤夏帆(いわさわなつほ)さん(右)。竹下佳奈(たけしたかな)さん(左)。2024年秋に完成のTODAビルを拠点に、多様なアート事業に取り組み。

仮囲いに印刷された自身の作品の横に立つコケシスキーさん。「自分の絵がまちの風景の一部になるのは不思議な体験。初めて見たとき、同行の弟に面倒くさがられながらも、たくさん写真を撮ってもらいました」



「KYOBASHI ART WALL」第1回優秀作品入選者

Kokeshisky / コケシスキー

招待作家



未来への出発点
京橋で生まれるアートのエネルギー

KYOBASHI ART WALL 2024年、新たな芸術文化の場オープンに先駆けて、建設現場の仮囲いに、建設現場の優秀作家には、TODAビル建設の機会を提供します。そして、京橋は、江戸の頃、京へ向かうはじまったばかりの長い旅路。今、この街は都市開発によって戸田建設は、芸術文化によってアート事業をはじめます。未来へ向かうはじまりの場所であったこの場所から、私

東の活動支援プロジェクトです。UILDING」(以下、「TODAビル」)の集します。の掲出に加え、京橋エリアでの個展歴代の入選作家の展示を行います。名がつけられました。々の思いがあらわれた地名です。京橋の未来の一歩を担う私たち24年オープンしたTODAビルを舞台に見通すアート表現を発信してください。

2021年11月 - 2024年3月

主催：戸田建設株式会社 後援：中央区



戸田建設 京橋プロジェクト推進部

アーティストとともに
成長していくまちをつくる

東京駅の八重洲口を背にまっすぐ歩いていくと京橋に出る。日本有数のビジネス街として知られるが、芸術・文化のまちとしても、大きく変わろうとしている。

その拠点のひとつが、2024年秋の完成を目指す、戸田建設が手掛ける「TODA BUILDING」。通称「TODAビル」。ミュージアムやギャラリーなどを擁するこのビルから「ART POWER KYOBASHI」の名のもとに、多様なアート事業を展開していく予定だ。ビルの完成に先駆け行われているのが、建設現場の仮囲いを使った公募プロジェクト「KYOBASHI ART WALL」。「当社のアート事業の目的のひとつが、芸術家の育成、支援です。ビルの完成までに、できることを始めようとプロジェクトが発足。2021年より全4回公募を行っています」と竹下佳奈さん。

入賞した作品は5㎡の大きさに印刷し仮囲いに掲出。さらに近くにある「KYOBASHI ART ROOM」にて、展示会を開催する機会を提供している。「ビル完成後には歴代入選作品の展示



TODAビル建設現場の仮囲いにアート発信の場に。作品から受ける刺激とともに、アートで新しくまちが生まれ変わる風景にワクワクする。

戸田建設株式会社

京橋の地に120年余りの歴史を持つ総合建設会社。2024年完成のTODAビルには、ミュージアム、ホール、ギャラリー、アートショップ、カフェなどが入り、誰もが気軽にアートを体感できる芸術・文化の新拠点に。

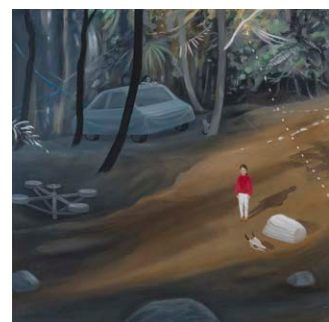
<https://www.toda.co.jp/>

● TODA BUILDING (建設中仮囲い) 東京都中央区京橋1-7-1

入選をきっかけに、
作品への向き合い方も変化

「KYOBASHI ART WALL」の第1回優秀作品賞に入選したお二人のうちのひとりが、コケシスキーさん。「募集を知ったのが締め切りまでひと月もなく、家にあったキャンバスも1枚だけ。でも珍しく筆が進み、描き上げたことで満足していたのですが、入賞の知らせをいただいたときとても驚きました」

建設中のビルの仮囲いに掲出されることも、大きな魅力となったそう。「大きさにまず圧倒されました。普段はギャラリーなどの白い壁にある作品がまちの風景の中にあるのは、内と外の関係が反転したようで、おもしろいなと思いました」



「KYOBASHI ART WALL」第1回優秀作品入選作『Hole』。2022年秋に、どこかにあるような、どこにもない情景をテーマにした個展『Somewhere』が「KYOBASHI ART ROOM」にて開催された。

コケシスキー

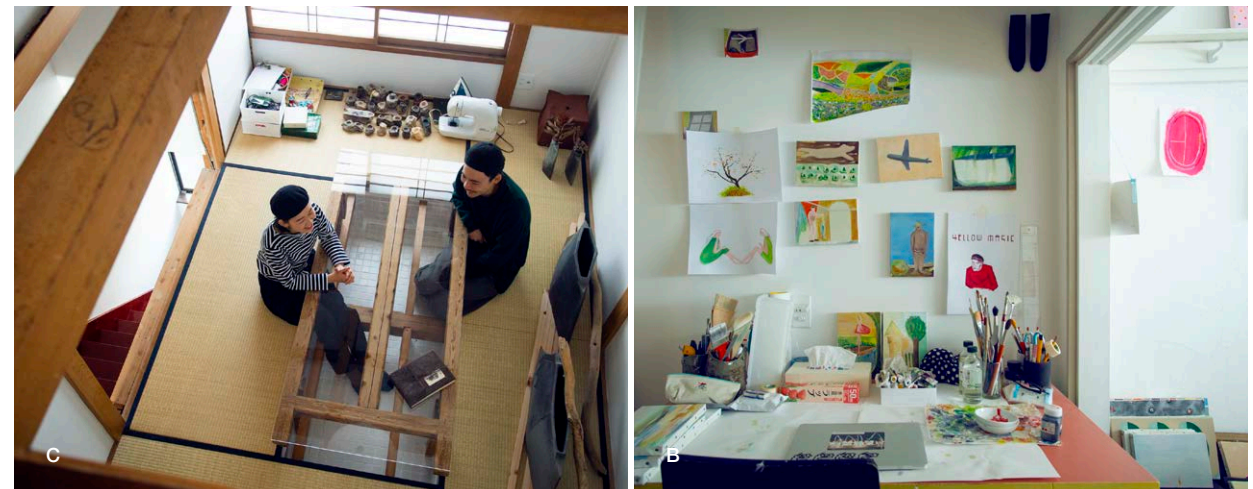
多摩美術大学デザイン科卒業後渡米。ニューヨークのPlatt Instituteを卒業、MFA取得。帰国後デザイン業に従事するかたわら、2005年より絵画制作を開始し、2016年、制作のフィールドをファインアートに移す。2023年は活動の場を広げ、関西でもアートフェアに出展し、個展を行う予定。

<https://www.instagram.com/kokeshisky/>

入賞を機に毎日絵を描く生活に。「入賞の半年後に展示会の機会をいただき、描かなきゃというのもあったのですが、どんなに疲れた日にも、線一本でも描くようにしています」子どもときから空想好きだったコケシスキーさん。瓦礫をドレスに見立てたり、時間の積み重なりを感じたり。そんな思考のアウトプットとして、キャンバスに向かう。「KYOBASHI ART WALL」を通じて、新しい縁が生まれ、活動の場が広がっていく。「第1回の入賞なので、ビルの完成までいけば長く目に触れるのもうれいですがね」生まれ変わる京橋のまちから大きな一歩を踏み出したコケシスキーさん。今後多くのアーティストが続く未来が見える。

Yamanote Line Museum

20代アーティストの自由な感性が まちと人と、アートをつなげる



駅を行き交う人をも巻き込み、
アートを日常の中に持ち込む

2020年の暮れも押し迫っていた頃、JR山手線の西日暮里駅内に、たったの4日間だが不思議なスポットができた。そこにはごみ箱が置かれ、机に紙が用意されていた。そして通行人が自分の気持ちを紙に書いてくしゃつと丸め、ライントレープの手前からごみ箱に投げ入れる――。

これは、駅を利用する人なら誰もが参加できるアートとして企画された。コロナ禍元年ともいえるべき年の年末、鬱屈とした気持ちを投げ捨てたい！と惹きつけられた人は多く、〈気持ち〉は500ほど集まったそう。

仕掛けたのは、柳瀬正義さんと吉野真央さん。MELTedMEADOW（略称メルメ）というユニットで活動しており、当時はまだ学生だった。「駅は年齢問わず、属性問わず、好きとか嫌いとかも関係なく、多くの人が集まってくる場所。アートに興味のない人も当然多く行き交います。そんな人たちを巻き込んで、体感できることをしたいと思っただけです。この場所でやりたいと自分たちで企画

を持ち込みました」と柳瀬さん。

この活動をきっかけに、メルメとJR東日本「東京感動線」との関わりが生まれた。二人がキュレーターとなり、アートプロジェクトの企画に参加するようになったのだ。

そんな二人のアトリエにお邪魔してみると、ちよつと懐かしい雰囲気のある古民家の中におおらかな空間が作られていた。自分たちで家の外も中も全体を真っ白に塗り、天井の一部は取り壊した。構造を現しにした場所もあり、そのうえ、階段は赤色だ。メルメの自由さを表現しているような場で、最近はこちらをギャラリーとしてアーティストの作品展を開催することもある。

自分自身も、敷居が高くて入りにくいギャラリーではなく、カフェのような、いろいろな人が出入りする場所で作品展をするのが好きだという吉野さんは、「日常により近い場所で作品と出会うって欲しいという気持ち。同じように感じるアーティストたちがいて、私たちのアトリエのような場で展示をしたいという声があるんです」と話す。

コーヒーを飲みながら
アート鑑賞ができる！

場所は変わって、山手線の高田馬場駅。改札の左手にあるカフェ内には、二人がキュレーションを手がけるギャラリーがある。

JR東日本の「東京感動線」が手がける「Yamanote Line Museum」の拠点のひとつだ。ギャラリーとはいってもカフェの壁なので、利用客の身近に作品が掲げられている。コーヒーを飲みながら、ふと顔を上げれば、そこにアートがあるのだ。

「どのプロジェクトでも、外に開かれたエネルギーを持つ作家に注目している」というメルメだが、この場ではさらに若手を中心に紹介。展示が替わるたびに、店のイメージは一新される。常連のお客さまと店舗スタッフの間で「絵が替わったね」という会話が自然と生まれているそう。

偶然に、自然に
アートと出会える場を作る

普段はあまりアートに馴染みがない、そんな人にも自然にアートに触れてほしい。メルメが関わるプロジェクト

A 吉野さんのアトリエは屋根裏部屋のような空間。メルメの活動とは別に自身の制作も進めている。最近では、世界的アパレルブランドにアートワークを採用されるなど活動を広げている。
B 柳瀬さんのアトリエスペース。描いた作品をデスクまわりの壁面に貼り出している。自分を型にはめ込まず、画材も表現方法も決め込まず、何にでもトライする。最近は詩も執筆。
C 天井の一部は取り壊し、吹き抜けに。座卓に座ったときに足が入るよう、掘りごたつのように床を下げ、タイルも自分たちで張った。量職人が使っていたという台が、座卓になっている。

MELTedMEADOW（略称メルメ）

柳瀬正義（やなせまさよし）さん、吉野真央（よしのまお）さんの二人からなる、アートディレクションユニット。東京藝術大学在学中に活動を開始。各自の創作活動を続けながら、JR東日本「東京感動線」や商業施設のアート企画、アートによるブランディングに関わっている。今年、岐阜県にアトリエを移転する予定。



Yamanote Line Museum

構 想 座 談 会

アートを身近にする Yamanote Line Museum。その構想について、全体ディレクションを担う Polar Inc.、アートディレクションを手掛ける SPREAD の方々と、JR 東日本 東京感動線メンバーが語り合いました。

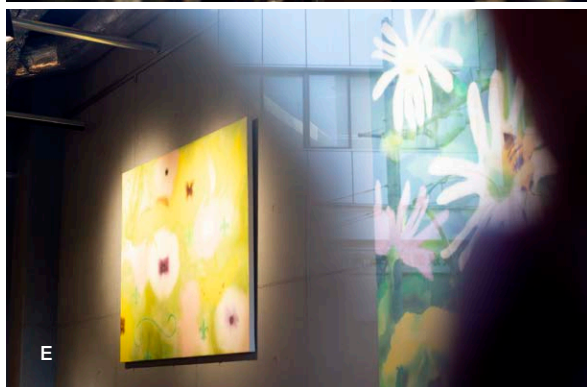
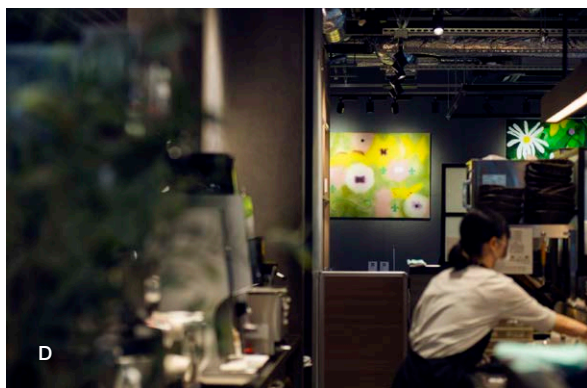


右奥から SPREAD の小林弘和氏、山田春奈氏、Polar Inc. の曾田真菜氏、林貴則氏、左奥から JR 東日本の服部晴文、斎藤千明、前嶋理恵。

に共通する思いだ。だから二人はギャラリー内にとどまるのではなく、まっへ出ることを意識して活動している。

例えば、上野駅の商業施設内に期間限定で生み出された「ueno art park」しかり。そこでは人々が待ち合わせをしたり、ただコーヒーを飲んだり。そんな公園のように気軽に立ち寄れる場を作り、アートを配した。すると、駅を利用するためにそこにいる人が無意識下で作品を目にし、作品と時間を過ごすことになる（現在は終了）。

上野駅公園改札内にある「Yamanote Line Museum 上野駅公園口」も同じ。



通常は広告用に使われるポスターフレームにアートが飾られ、駅構内の連絡通路に掲げられた。タイトル脇の二次元コードを読み込めば、そのまま購入ができる仕組みも構築。「ふと通りがかつたお客さまが、仕事の昇進試験に合格した自分へのギフトとして買ってくれたと聞きました。見るだけでよかったという話はうれしいですね」

不特定多数の人が行き交う場所をアートで彩るメルメの試み、これからまだまだ続いていくようだ。

アートと人の距離を縮めたい 目指すのは「アートの民主化」

JR 東日本（以下 東） 近年、NFT の浸透など、アートを取り巻く環境が変わってきていますね。オークションでも現代アートの占める割合が大きくなっていくと聞きます。そうした中で JR 東日本がアートに取り組むことの意味を考えたいんです。

Yamanote Line Museum はアートが駅の中にもともとある感じじゃないですか。アートを鑑賞しようという目的性を持って行く美術館より、もっと日常的で、歩いていてふとアートに出会うというのがいいし、それをやっていきたい。アートと人の距離を変えたいと思ってるんですよ。いわばアートを民主化するというか。それは今世界的にもトレンドだと思ってるんですが、駅でもそういう取り組みがあるよっていうことを伝えていきたいですね。

Polar Inc.（以下 P） もっと距離を近づけることができればいいし、駅はそれができる可能性がすごくあるんじゃないですか。Yamanote Line Museum はその距離を縮めるやり方を模索していくプロジェクトなのかと思いますね。

SPREAD（以下 S） 日本の一般家



D スピーディーにコーヒーが準備されるカウンター越しにもアートが目に入る。ふだん、アートに馴染みがないというアルバイトスタッフも、「展示が替わるごとに雰囲気ガラッと変わって、いい空間だと感じる」と話す。

E 撮影時は、伊藤瑞生さんの個展「できるだけながく息をはく」が開催。2023年3月20日頃まで展示予定。作品はすべて販売されており、作品横の二次元コードから購入可能なウェブサイトへアクセスできる。

F 現在は株式会社 NOMAL がキュレーションを担当。2023年2月からは絵描き/ライブペインターのいくまりえさんによるアートが駅構内を柔らかに彩る。

「Yamanote Line Museum 高田馬場」
高田馬場駅早稲田口改札外
BECK'S COFFEE SHOP 高田馬場店内
営業時間：6:30～21:00（土・日曜、祝日は～20:00）
電話番号：090-9830-3732

「Yamanote Line Museum 上野駅公園口」
上野駅公園改札内
営業時間：駅の営業時間に準じる

庭には絵を飾るような文化があまりなくて。かつては和室があったので、掛け軸とかを飾っていたんですけど、やっぱり今は難しいですね。それで駅を歩いていて作品があったら、自然にちらちら目に入る。毎日そこを通っていたら作品を見ると、このとがとんどん日常になっていく。駅はそれがすごくできる環境ですよ。

自分が知らなかったものの 出会いが心を豊かにする

東 それで、何のためにアートとの距離を縮めようとしているのかって考えたんですけど（笑）。アートにはアーティストの考えがたくさん詰まっているじゃないですか。それと正面から向き合うのは大変だけど、駅で日常的にアートを見ることは、自分の考えと違うものがあることに對して寛容になれる機会になるというか。自分が知らなかったものと触れ合う機会が多いほど、何か心豊かになれるんじゃないかと思っています。

S 今はいろんなものが発達しすぎて、情報も自分の見たいものしか入ってこなかったり、出会う人もマッチングアプリとかで自分と合う人というふうにして決めてしまう。自分の中になかったものが入ってくるきっかけ

が本当に減っていますね。自分が求めていなかったものの突然の出会いで、自分の中に化学反応が起きるのは必要なことだと思います。

P 異物が突然目の前に現れる。ネット書店じゃなくて実店舗の本屋さんに行ったときの感じですね。知らないものと出会う機会が減ること、知れば興味わくかもしれないことがとんどん遠くなってしまう。

東 本屋さんでビビッとくる感覚は、そういう環境がないと養えない。日常の積み重ねで感覚を磨くようなことを少しでも Yamanote Line Museum でやっていけたら。不特定多数の人が大勢来る駅は出会いに向いていて、それが駅の意外な強みですね。そういうわけで、日常の駅にアートがあるの、これからすごく意義があることになってくるんじゃないかと思っています。

Polar Inc.
「コンテクスト（文脈）」を手がかりに、企業やブランドのアイデンティティ構築を手がけるクリエイティブファーム。リサーチからデザイン、エデュケーションという独自のメソッドで幅広いジャンルで活動している。

SPREAD
山田春奈氏と小林弘和氏によるクリエイティブ・ユニット。長い時間軸で環境をとらえるランドスケープデザインの思考と、鮮烈な印象を視覚に伝えるグラフィックデザインの手法を融合させたクリエイティブを行う。

本物に出会った感動を 何倍にもしてくれる ミュージアムグッズの魅力

一枚のポストカードが
感動の記憶を呼び起こす

美術館や博物館に行く楽しみのひとつに、ミュージアムグッズがある。ポストカードやマグカップ、マグネット、Tシャツなどのグッズに、「持つて帰りたい」「誰かに贈りたい」という気持ちや、作品やアーティストについて、「もつと知りたい」という好奇心がわいてくる。

そんなミュージアムグッズの数々を手掛けるのが、開永一郎さんが代表を務める株式会社Eastだ。2010年の『ルーシー・リー展』や2016年『生誕300年記念若冲展』、2018年『ムンク展―共鳴する魂の叫び』、2022年『マリ・クワント展』など、「East」がミュージアムグッズを制作した展覧会を挙げていくときりがなく、印象派から現代アート、日本画、陶芸、デザイン、

ファッションなどジャンルも時代も縦横無尽。アート好きならずとも、ちょっとした「East」のミュージアムグッズに出会っているのではないだろうか。

開さんが大切にしているのは、作品の持つ「本物」の力。「グッズを本物に近づけたいわけではないです。何十億もの価値がある絵画を1枚160円のポストカードで同じように再現することは残念ながら不可能です。それでも、ていねいにつくられたカードは、本物の作品をご覧になられた人たちの感動を、記憶に残すお役に立てるかもしれません」

展覧会開催の1〜5年前から準備がスタート。開さんはできる限り、関連の土地や時代背景のリサーチ、周囲へのインタビューを重ねて、アーティストや作品の魅力グッズへと反映させていく。

国宝の茶碗「曜変天目」が
ぬいぐるみに！

そのグッズには美しさとともにユーモアがある。開さんいわく「作品を見た人や好きな人に通じる洒落のようなもの」。その代表例が、2022年に静嘉堂文庫美術館のグッズとして制作した「曜変天目（稲葉天目）」の原寸大ぬいぐるみ。本物は購入はもちろん、触れることさえ不可能に近い国宝の茶碗を「ぬいぐるみ」にしてしまうという大胆で楽しい発想。「でも、ショップでこれを手にとった人は、本物みたいに両手で大事そうに扱ってください」と開さんは笑う。これこそが、まさに作品の持つ「本物」の力だろう。

ぬいぐるみのアイデアに対し、多くの人が「できない」と口にしたが、開さんは「だからこそ、できたらおもしろいな」と考える人。ものづくりの現場と試行錯誤を重ね、完成に至る。大きな話題と人気を呼び、新聞の一面にも取り上げられた。

そして「East」はグッズをつくるだけでなく、ミュージアムショップの運営も行う。「すべての展覧会ではないのですが、内装から仕器のデ

ザイン、ショップスタッフの面接も行います」。単にグッズを売る場所ではない、展示室の延長にあるミュージアムショップ。壁の色やディスプレイ、商品構成にもこだわる。スタッフはお客さまの感動に寄り添い、展覧会やグッズ制作に込められた想いも伝えていく。「つい先日、13年も前に開催された展覧会のポストカードを何枚も大切そうにお持ちくださった人とお会いしました。ポストカードを見ると、展覧会で作品を見た時の感動がはつきりと思い出されると言ってくださり、続けてきてよかったです、心から思えた瞬間でした」

今後も展覧会の予定は目白押し。どんなグッズでアートの魅力をさらに広げてくれるのか楽しみだ。

A 2022年開催の『特別展アリスーへんてこりん、へんてこりんな世界』で人気を集めたチェシャ猫のぬいぐるみ。コロんとした形がたまらない。
B 2022年『マリ・クワント展』のモノトーンマグカップ。シンボルでもある花をはじめ、水玉、ストライプなどのパターンは手描きで描かれている。
C 2022年『イックラ展 フィンランドガラスのきらめき』では、オイヴァ・トイッカの作品をマグネットとピンバッジに。ガラスの光沢感まで再現。



株式会社 East 代表取締役 開 永一郎さん

ひらき・えいいちろう。ミュージアムグッズの企画、デザイン、製造からミュージアムショップの運営も手掛ける。好きなミュージアムはロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
<http://east-inc.co.jp/>



「East」が手掛けた
ミュージアムグッズの数々

A

B



「East」が手掛けた
ミュージアムグッズの数々

C

「廃棄物を宝物に」をテーマに、
芸術で生まれ変わった
アート展示がスタート

2023年3月に、四ツ谷駅構内に新たにアートスペースが開業します。キュレーションを担当するリフレクトアート株式会社は、捨てられるものをアートで作り替え、より良いものにアップグレードするアップサイクル商品を手がけるカンパニー。布看板の印刷工場で出る廃棄布がアップサイクルされて生まれ変わった、アートやグッズの展示をお楽しみいただけます。



場所:四ツ谷・麴町口改札外(四ツ谷口方面)
営業時間:初電～終電
※写真はイメージです。

訪れるごとに新たなアートとの
出会いを愉しめるスペース

気軽にアートとふれあえる機会を提供するアートスペースが中野駅に開業。不定期で作品が入れ替わり、訪れるごとに新たなアートとの出会いが愉しめます。第1弾として、2023年2月28日まで、中野駅や駅を走る電車をイメージした6組のアーティスト作品を展示。引き続き新たな展示もスタートしています。気に入った作品はJRE MALL内「東京感動線ショップ」で購入できます。



場所:中野駅南口改札外(みどりの窓口内イベントスペース)
営業時間:8:00～20:00
*みどりの窓口の営業時間に準じます

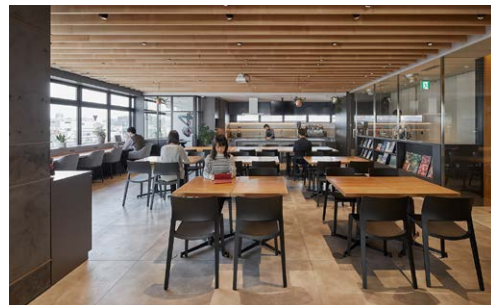
新しい食文化や食を通じた新たなライフ
スタイルを提案する「食のプラットフォーム」

新大久保駅直上にある「K,D,C,,, (キムチドリアンカルダモン)」は、食特化型のコワーキングスペース、フードホールからなるフードラボ。食ビジネスへのチャレンジや商品開発を支援し、新しい食体験を提供する場として、また多種多様な食のプロフェッショナルやプロを志す方々の交流拠点として、新たな食文化の創出を目指しています。3階フードホールには2023年2月10日に「チカバ」が新たにオープンしました。

地方を身近に感じられるワンプレート等のしっかりご飯から、こだわりのデザート・ドリンクまで。「ちょっとお腹すいたな」「軽く一杯だけ……」という時の利用にもぴったりなメニューが揃う。写真は岩手の菜彩鶏の塩こうじロースト国産レモンソースタムバター添え。副菜には岩手の郷土料理の菊のくるみみえほか、地方の食材がたっぷり(時期によってメニューは変わります)。



場所:東京都新宿区百人町11-10-15 JR新大久保駅ビル3・4F
営業時間:3F「Kitchen & Bar しんおおくぼ ちかバ」～3/26 11:00～21:00(L.O.20:30)、3/28～ 11:00～23:00(L.O.22:30)月曜定休(祝日の場合は翌火曜休み) 4Fコワーキングスペース・ファクトリーキッチン 平日9:00～18:00 <https://kdc-foodlab.com/>



Kimchi,
Durian,
Cardamom,,,
encounters with new food culture

「食」に携わる人、携わりたい人なら誰でも利用できる会員制のコワーキングスペース。ミーティングルームや撮影ブース等を備え、さまざまな人材育成や起業支援のプログラムも提供。

山手線の駅やまちを舞台に、
アート展示やワークショップ、
音楽イベントなどを開催

イベントタイトルの「HAND!」は「Have A Nice Day!」の頭文字をとり、山手線の「手」ともリンクさせたもの。山手線で一緒に楽しみましょう!という気持ちがこめられています。2020年の初開催以来、山手線30駅の広告フレームにライブペインティングを行う企画や、駅構内に誰もが自由に演奏できるピアノを設置した音楽イベントなどを実施。また期間限定で特別仕様の車両「山手線 ver.HAND! by 東京感動線」を運行し、気鋭アーティストたちの作品を中吊りとして展示しました。今後もお客さまの日常に驚きや感動、彩りをもたらすような、さまざまな企画をお届けします。



a 高輪ゲートウェイ駅での「Music Space in Winter」の様子(2022年)。駅構内に設置された Station Piano 前のスペースで、お手持ちの楽器を自由に演奏できるイベントを開催。
b 山手線の中吊り広告スペースに展示されたアート作品(2022年)。11車両に11アーティストの実物作品が並ぶ「YAMANOTE LINE MUSEUM NAKAZURI gallery」を実施。
c 有楽町駅から続く「日比谷 OKUROJI」では、ショップスタッフやお客さまなど、さまざまな方が思い思いにアクリルチューブを手にして制作したものを展示(2022年)。

山手線めぐりを楽しむ
ショートトリップのお供に!
山手線の座席シート柄の
御朱印帳

山手線の特徴的な座席シート柄を、和の良さを活かした伝統的な西陣織で表現した御朱印帳。一般的な御朱印帳としてはもちろん、山手線沿線のそれぞれのまちの魅力をつづるノートとして、また旅の記録帳としてもお使いいただけます。JR東日本が運営するインターネットショッピングサイト JRE MALL 内「東京感動線ショップ」等で販売しています。

サイズ:縦約16.5×横約11.5×厚さ約1.7cm
3500円(税込み)
ショップページ:
<https://www.jreastmall.com/shop/c/cF8/>
*御朱印帳はなくなり次第販売終了となります



JR東日本東京感動線が手がける山手線沿線のモノ・コト・場所に触れることで、新しい世界への扉を開いてください。



東京の、
ちょっとだけ
未来の景色。



東京感動線

ここでは、いろいろな街と街、いろいろな人と人が、山手線という、フシギな輪っかできつなっている。違うもの同士が、つながりながら、ひろがっている。

そこから生まれてくるものは、思いもよらない発見、出会い、楽しさ、優しさ…。心が動き動かされる、新鮮な日々。

そこに生きるみんなで、東京を世界でいちばんの感動に満ちたワンダープレイスにしていけたらいいと思う。

具体的に何が生まれるかは、きっと本当にいろいろ、そしてまだ、本当に未知数だらけ。

でもそれが、これからいろいろな人たちと、いっしょにつくっていく、開かれた山手線の可能性だと思う。

東京感動線
WEBサイト

東京感動線
マガジン
アンケート

